

# 軍都構想と小松飛行場



神雷部隊の隊員たち（『北陸エアターミナルビル設立40周年記念誌40年のあゆみ』より）

昭和九年（一九三四）、白江村との合併問題を契機として「市制」を目指す議論が町議会で起こり、水害や二度の大火で都市としてのインフラ整備が焦眉の課題と



出撃前の訓示を受ける神雷部隊 昭和20年6月（個人提供）

なっていた小松町は、昭和十四年の「七尾市」誕生も刺激となって、遂に昭和



小松飛行場に来たゼロ戦の勇姿（『小松の軌跡』より）

十五年十二月に小松、安宅、牧、板津、御幸、栗津の二町六村を合併せしめて「小松市」となった。これは全国一七六番目で、南加賀最初の「市制」の誕生でもあった。



上写真：小松飛行場の十字型滑走路(小松市立博物館提供)  
左 図：海軍航空基地全図(『ふるさと石川歴史館』より)

翌昭和十六年十二月に「太平洋戦争」が勃発すると農地開発営団の手で安宅新、日末、浮柳三町にわたる松林が、「食糧増産」の名目で伐採されたが、これは「海軍飛行場」建設のためのカムフラージュであった。

山口又八市長と和田傳四郎市議会議長は陸軍第七師団が駐屯する「軍都金沢」に対抗して、海軍舞鶴鎮守府に対し、飛行場周辺の江沼郡町村を二期に分けて編入し、最終的には「人口五〇万人、総面積一六〇万平方メートル」を目指す空の「軍都計画書」を提出した。

これを受けた舞鶴鎮守府は、飛行場周辺施設を勤労働員等で拡充・整備するとともに、昭和十九年四月、海軍省に対して機密文書「小松市拡張の件」を紹会した。

しかし、戦局の悪化にともない「陸の

金沢」に対抗した「空の小松」の大軍都構想は進まなかったが、飛行場は航空基地として一定の役割を果たした。

一方、小松製作所は戦局激化に伴う陸海軍からの軍需に対応して「フル稼動」で生産を拡充し、県内唯一の「第一次指定軍需工場」となった。

かくして戦時下で誕生した「小松市」は、計画書通りの「空の軍都」にはなれなかったが、「飛行場と製作所」を基盤とした工業都市として、総力戦体制の中で着実に発展していった。

(平野 優)



モンペ姿で勤労働員される女生徒たち  
(『小松・加賀の100年』より)